

2024年2月14日(水)

老球の細道773号

パリ五輪男女自力出場！ハッピー・バレンタイン

会津バスケットボール協会 室井 富仁

バレンタインデーと縁がなくなってから何年経ただろう。かつて現役時代には「義理チョコ」「義務チョコ」「人情チョコ」「部活チョコ」「職場チョコ」「ヨイショチョコ」など色々なチョコを携えて自宅に凱旋したのだが、今は昔話。今年も音沙汰なし。孫娘たちにも連絡して、パパにチョコをやるんだよと教えてやりながら、爺にもとは言えなかった。

先日パリ五輪予選女子大会がハンガリーで行われた。日本女子は「死のブロック」と呼ばれる厳しいブロックで見事1位となり3大会連続6回目の五輪出場権を獲得した。BSNHKで3試合放映されたが、どの試合も1点差を争うシーソーゲームの連続で、テレビで観戦しドキドキしながら仮想ベンチワークをしていた。接戦こそバスケの醍醐味である。

すでに男子代表もパリ五輪出場権を獲得しているので男女が同時出場となる。前回の東京五輪は地元開催なので男女出場は自動的に決まっていたが、予選を勝ち抜いて出場する自力出場は1976年のカナダ・モントリオール五輪以来46年ぶりのことで歴史的な快挙。

モントリオール五輪は私の大学卒業の年に行われたのだが、何かと話題になり今でも記憶に新しい。特に、この大会において女子バスケットボール競技が初めて五輪の正式種目になったこと。また、日本の女子チームは五輪前の世界選手権大会(1975年コロンビア・カリ)において銀メダルを獲得していたので、五輪では旧ソ連(世界選手権優勝)と共に優勝候補の一角をしめていた。カリの世界選手権では、身長に劣る日本があみだした「マッハ攻撃(10秒でシュート)」「忍者デイフェンス(コートエリアを3分割してデイフェンスを変化)」などの戦術が注目された。個人では、今回のガード陣の活躍と同じように163cmの生井けい子(当時日体大職員)が大活躍をして大会MVPに選出された。

男子チームにおいては、会津坂下町出身の江川嘉孝さんが1964年東京五輪で選手として出場以来、今度はコーチとして五輪出場を果たした。選手、コーチの両方で五輪出場を成し遂げたのは日本の男女バスケットボール史上江川さん一人である。同じ会津人として誇り高いことである。

ちなみにモントリオール五輪は男子が11位。優勝を期待された女子は6チーム中5位という不本意な結果に終わったが、優勝した旧ソ連は別格として2位から5位の日本までは紙一重の差であったと『バスケットボールの歩み』(JBA発行)には記されている。

最後に、今回の女子予選を見ながら改めて考えさせられたのが座頭市の「市」ではなく数字の「1」の重みである。1本のフリースローミス、1本のターンオーバー、残り1秒のスローインプレイのデザイン、残り1回のタイムアウトのタイミングなどである。「1」をおろそかにすることはバスケットにおいて接戦のゲームを失うことである。逆に、諸々の「1」に誠実に準備、対処することは運を味方につける。「1円をおろそかにすれば1円に泣く」。

緊張を伴う「非日常」を乗り越えるには「日常」からの準備以外に対策はありえない。